

「雛」を朗読し始めた最初の頃は、作品の最後に近いところで老女が失った雛道具を次々と数え上げながら気持ちを昂ぶらせてゆく場面を、声でどう演技するかに興味があった。芥川は、育った家庭が代々江戸城の御奥坊主だし、育ての母の伯父は、山城河岸の津藤という大通だったから、物語の核になる雛にまつわるエピソードは身近にあったのだろうと見当はつけたけれど、それ以上には追求しなかった。朗読する際に「兄」の扱い方に戸惑う感じはあったものの、英語の勉強に熱心で、ちょっと皮肉屋に描かれているのが、何となく芥川自身を連想させるので、あまり深くも考えなかった。

* * *

だが先日、ふと本文のなかの「火事には三度も遭いますし」という言詞が気になって、明治の初めの頃の火事を“消防防災博物館”で検索してみた。すると、明治五年に丸の内、銀座、築地一帯が消失する大火事があったことが分つた。さらに明治十二年十二月、日本橋、京橋、八丁堀、新富、入船、佃の一部にまで及ぶ大火。十三年十二月、再び日本橋大火、神田、日本橋一帯を消失。十四年一月、東神田、日本橋馬喰町、横山町、本所、深川の一部まで消失する大火。二月に再び神田、日本橋の大火……と、明治新政府の首都東京の中心部は殆ど焼野原だったのではないかと思われるほど、立て続けに大火事の記録がある。

明治五年の銀座大火の火元は和田倉門内にあった旧会津藩藩邸だった。この大火事で耐火建築の重要性を認識した明治政府は、銀座通り沿いに煉瓦造りの建物を建築し「煉瓦通り」と呼ばれた。だが、漆喰で固めて半分は木造のような煉瓦造りだった家並みは、関東大震災で跡形もなくなったという。

これを知った時、何かがすうっと開けた。本文に書かれている“人力車で会津っ原から煉瓦通りへ”という言詞は、ただ近所を人力車でぐるっと廻ってくるという意味では無かったのだ。私はずっと、ただその辺を散歩して来る程度にしか思っていなかった。

芥川は、雛人形を外国人に売ったことの顛末に絡め、幕末から維新を経て激変した社会に翻弄される或る家族の姿を描き、それを通して明治の世相を切り取って見せようとしたのだ。

作品の最後に「「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。」とあるが、全集にその「雛」の草稿が所載されている。冒頭は作家の家庭を思わせるような描写で、夫が妻に昔のことを話して聞かせる形で「銀座通りに鉄道馬車もなかった時分」の話に入っていく。銀座通りに鉄道馬車が開通するのは明治十五年六月だから、この話は明治十三年の十一月か明治十四年の十一月にあったことなのだろう。そして「雛」の本文では、もと肴屋で人力車夫になった徳蔵が「お嬢さんを人力車にお乗せ申して、会津っ原から煉瓦通りへでもお伴をさせていただきたい」と言う。会津藩は御三家に準ずる“親藩”だったから、江

に変えたと考えられる。実際には、芥川の育ての母は津国屋の姪で、その父伊三郎が御金御用、或いは札差ふださしをしていたかどうかは分からないが、既に或る程度の文学的な変容を施してはいたわけだ。それを、もう一つ客観視できるようにしたかったのだろう。津藤は、今の紀ノ国屋文左衛門、「今紀文」いまきぶんとも呼ばれていたからそういう連想で“紀の国屋”にしたのかもしれない。

姉妹だったのを兄妹にしたのは、物語の家族構成によって“明治の世相”を表現するために必要だったに違いない。古い物を否定し、新しい物を積極的に受け入れようと熱心に英語を勉強する、当時の典型的な人物の一例として兄を設定した。そして「永年政治に奔走して」という本文は、この人物が自由民権運動に身を投じたことを想像させる。さらに「癲狂院へ送られる」という本文は何という皮肉な設定だろうか。新しい知識、新しい事物、西洋の受容に熱心だった人物が、西洋の精神医学に依拠して新たに設立された精神病院に収容されるのだから。これは、和魂洋才などと言いながら、西洋の上辺うわべの形だけを取り込んでいく社会の行き着く先はどうなるのかという、芥川が漱石から受け継いだ問いの変奏にも見える。芥川はこの兄なる人物にはもう一つ皮肉な事をさせている。母親の面癩を治療する為に、兄が「毎日十五銭ずつ蛭ひるを買いに」行くのだ。先進的な兄が原始的な民間療法を頼りにする矛盾。それは明治の社会そのものが抱えていた矛盾でもあるだろう。

妹娘が人力車で出掛けて行った先は黒門町の親戚の店だったのを、「会津っ原から煉瓦通りへの江戸見物」にしたというのが、最も大きな変化で芥川の意図が明確に示されている部分だと思う。瓦解した旧体制から、外形だけ西洋を真似て急拵きゅうごしらえした新体制へということを象徴しており、身内の思い出話から普遍性を持つ作品へと変化した鍵でもある。徳蔵に「江戸見物」と言わせているのも興味深い。庶民にとって、これまで暮らしていた「お江戸」を突然「東京」と呼び変えられても、簡単には馴染めなかつただろう。

一方、「明治」「雛（草稿）」「雛」の中で変化させなかつた事は何か。それは「雛道具一式を外国人に売った」という事だ。

「雛（草稿）」に、「これは細君が幼い時にかしづいた雛を祭ったのである。」という表現がある。現在では“お雛さまを飾る”としか言わないけれども、飾り付ける行為のうちには“お雛様のお世話をする”感覚が有るように思う。そして桃の花や貝やお菓子おもちやを添えて楽しむ雛祭りには、“お供えをしてお祀りする”意識が深層に流れている。雛人形が玩具ではなく、女兒の健やかな成長と人生の仕合わせを願い、祈りを込めて親が用意するものという共通認識があるからだ。

しかしそれは、そうした文化的背景を持たない人々には理解されない。「雛」の最後に「古雛の首を玩具にしている紅毛の童女に遇った」と芥川は書いている。これが事実かどうかは分からないが、この最後の文章で、芥川は歴史や文化の背景が理解されなければ不当な扱いを受ける事を端的に伝えている。

経済的に追い詰められた一家にとって、同じ“売る”のであっても共通の価値観を持って

いる人に売るのであれば、受け止め方も又少し違っただろう。他所へ行っても其処で傳かしのかれ、大事に伝えられて行くであろうという安心感と共に引き渡せる。しかし明治時代に外国人に渡すとなれば、その後はどうなるのかと不安な思いの方が強かったのではないか。

にも拘わらず外国人に売らねばならなかったのは、当時まとまった金額を支払えるのは御雇外国人のような人達しかいなかった事が考えられる。社会制度の急変と度重なる大火で重い経済的負担を抱えていたのは、この一家だけでは無かった筈だ。総桐の箱三十にも収められた贅沢な雛道具を買い取るだけの経済力を持った人物は、容易に見当たらなかったのだらう。

そして“雛人形を異人に売り渡す”という事が、一家に靄のような目に見えない緊張感をもたらす。わずか半月ほどのその日々が「雛」の物語として展開される。

手付け金を受取って売買が成立した時、最も悲しみ深く受け止めたのは母親だ。「伏し眼になった睫毛の裏に涙を一ぱいためて」いる。この母親は、旧い時代や価値観を現し、兄と対立する役割を与えられている。母親は程なく面疔を患うのだが、悲しみの深さが病を引き起こしたかとさえ思われる。

“雛を売り渡す”ことにそれほど抵抗が無いように見えていた娘も、やがて雛への断ち難い愛着を自覚する。娘は少し幼げに描かれていて、世の中が移り変わり家族が皆亡くなってしまった後に、出来事を物語る役割を担う。

雛道具など「実用にならない物は取って置いても仕方がない」と、積極的に売ろうとしているかに見えた兄が「見りゃあみんなに未練がでる」という台詞せりふで心の裡を一瞬見せる。此処が、母親と諍いさかいをした時に突然泣く場面と関連する。彼は彼なりに零落した一家を立て直したい思いがあり、その為には英語が必須であり、新しい物事を積極的に受け入れなければと考えているのが母親には全く理解されない。それどころか母親から「お前はわたしが憎いのだらう」と詰なじられる、その遣やる瀬無さ。

転変する時代の波に翻弄され、娘の雛を手放さなくてはならなくなった事態に、誰よりも無念な思いを噛み締めていたのは父親に他ならない。売る前に一目だけ雛を見ておきたいという娘の願いを頑として撥はね付けていた父親が、明日は売り渡すという前夜に、家族が寝静まってから雛を取り出してじっと眺めている。娘はそれを夢うつつに目にし、生涯忘れ難い思いをする。「明治」では「父が・・・略・・・何時までも飽かずに ぢつと眺めてゐるのを見た。妹は その時心に 二度とお雛様を見たいなどは 云ふまいと誓たのである。」となっている。そこからは、娘が子供ながらに父を庇かばわなければいけないような複雑な感情を抱いたのだと推し量ることが出来る。

その複雑な思いは娘の心に深く刻まれて、その時の情景と感情とは終生忘れられないものとなる。物語るうちに、娘の頃のその複雑な思いを再び思い起こす老女の感懐、「夢かと思ふと申すのは」という言詞を二度も繰り返して心の昂ぶりを示す心理表現は、演技する者にとって矢張り魅惑的な件くだりだと思う。